みどり山防災ニュース

発行：三輪緑山自治会自主防災隊編集委員会
三輪緑山３－１－１３　☎０４４－９８７－７４９５

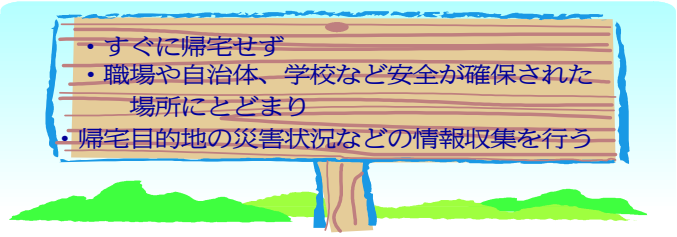
NHKスペシャル　シリーズ体感
首都直下地震
「スペシャルドラマ『パラレル東京』」から
2019年12月1日~12月５日放送

新しい令和の時代も様々な災害に襲われ大きな被害を受け続けている日本。しかし、自分自身に現実に起こり得る災害として実感しつつ備えをしているとは言い難いのが現状かと思います。
ところが、です。今後３０年以内に７０パーセントという高い確率で、大災害をもたらす首都直下地震が発生することが懸念されているのです。
内閣府はこの首都直下地震の被害を次のように想定をしています（２０１３年）：

- 想定マグニチュード；7.３
- 最大震度；７
- 揺れによる全壊家屋；最大約１７万５千棟
- 焼失家屋；４１万２千棟
- 死者；２万３千人
- 負傷者；１２万３千人
- 経済的被害；９５兆円　など

この被害想定はどこから出てきたのでしょう？首都直下地震が発生したら一体何が起きるのでしょうか？NHKでは昨年12月上旬に、その被害の全貌を、内閣府中央防災会議作成の被害想定に最新の研究成果を加え、限りなくリアルにドラマ化して放映しました。そこから学ぶものは何か？一視聴者として考えたことを本シリーズを通じてお伝えしていきたいと思います。今回は地震発災１日目の状況を描いたドラマから学びます。

DAY１ ―地震発生当日―あなたを襲う震度７の衝撃
（2019年12月２日放送）
地震発災当日。この日の状況を描いたドラマの中で特筆すべきは、人々が一ヶ所に密集し、折り重なって倒れ込むことで圧死する「群衆雪崩（ぐんしゅうなだれ）」です。2001年の明石花火大会歩道橋事故で耳にされた方も多いかと思います。
ドラマ内では、首都直下地震により多数の建物崩壊、土砂崩れと列車脱線、同時多発火災、１都３県の停電といった都市機能の麻痺により、800万人を超える帰宅困難者が発生しました。帰宅を急ぐ多数の人の流れは異常な密集状況を作り出し、それが群衆雪崩を誘発し、多くの死傷者が出る事態となっていました。
2011年の東日本大震災では約500万人の帰宅困難者が出たと言われていますが、建物倒壊や火災などが少なく、歩いて帰宅できた人も多数いました。しかし、首都直下地震が発生すると、建物崩壊や火災などが多発します。そうした状況下での徒歩による帰宅は、危険と隣り合わせの行為であり、徒歩での帰宅に専門家から強い警鐘が鳴らされています。
では、現実にはいかに対応すべきかというと



ことが推奨されました。
家族の安否が心配で、誰もが居ても立っても居られない心境かと思います。だからこそ、「日頃から家具固定など耐震化を図り、家に居れば家族は安全である、という状況を作っておく」「家族間の安否確認方法を日頃から取り決めておく」ということが重要だとしています。私はまさにここが学ぶべき点でありかつ実践すべきことと考えます。
首都直下地震発災当日の被害として群衆雪崩に加えてもう一点、特筆すべきものに「同時多発火災」が挙げられます。これは多数の消防車の出動を必要とし、消防車不足の状況を生み出します。消防車が消火に行けない現場の火災はどんどん広がり、それがさらなる被害へと繋がります。
それは次号、「DAY２」で。

NHK「体感 首都直下地震ウィーク」より

語り継がれる「稲むらの火」
～災害の記憶を伝える大切さ～

紀州の広村（現在の和歌山県広川町）は湾の最奥部に位置するため、古くから津波で甚大な被害を受けてきました。室町時代に海岸に石垣が作られ、津波被害を防いできたものの、1707年の宝永地震では1000戸ともいわれた家屋のうち850戸が失われるという壊滅的な被害を受けました。壊れた石垣は修復されるものの再び破損。そこで村人はたびたび石垣修復の嘆願書を藩に提出しましたが、財政的な問題で修復はなかなかされませんでした。

そこに1854年、安政南海地震がやってきます。ここで活躍したのが濱口梧陵です。梧陵は広村の出身で、広村から関東に進出したヤマサ醤油の当主でしたが、正月を過ごすために広村に戻っていました。
広村で地震に遭遇した梧陵は、若者をつれて稲むらに火をつけてまわり、暗闇の中を逃げまわっている人が高台へ逃げるための目印としました。流出・半壊した家屋は181戸に上ったものの、梧陵の機転により村人の死者は30人に留まり、9割以上の村人が生き抜くことができました。
梧陵の活躍は、実は災害時に留まりませんでした。災害後、当時としては最大級の堤防「広村堤防」を、私財を投じて建設したのです。梧陵は津波による災害を危惧しただけではありません。村人の雇用を確保し、村の人口流出を止め、復興支援を行おうとしたのです。賃金は日払い、堤防には松林の内側にロウソクの材料になるハゼの木を植えることで現金収入を得させようというところまで心配りをし、村人は喜んで堤防の建設・保守に従事しました。
この堤防、1913年の高波、1944年の昭和東南海地震、1946年の昭和南海地震と、数度の津波から村人を救っています。濱口梧陵は、機転だけでなく、真に自己犠牲、献身の人だったのですね。

一村の逸話に終わらなかった「稲むらの火」
稲むらに火をつけた梧陵のエピソードは、一村の逸話では終りませんでした。1896年に起こった明治三陸地震をきっかけに大阪毎日新聞が梧陵のエピソードを掲載、当時神戸の新聞記者だった小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）に知られることとなりました。このエピソードに感激した八雲は梧陵を主人公にした物語「A Living God（生き神様）」を作っています。
そして地元にもこのような偉人がいることを八雲の作品から知った和歌山県の教員・中井常蔵が、小学生にもわかりやすい話として改作し、文部省の教材募集に応募します。こうして「稲むらの火」は1937年から約10年間、全国の尋常小学校の国語読本に採用され、戦前に小学校教育を受けた人々の防災の啓蒙に役立ちました。

世界の防災啓蒙に引用される
「稲むらの火」の歴史はまだ終わりません。スマトラ島沖地震の翌年、2005年に神戸で開催された世界防災会議で「稲むらの火」が紹介され、各国に知られるところとなり、アジア防災センターではアジア8カ国に用いられることを想定した9カ国語のテキストを配布しています。
そしてついに国連が「稲むらの火」に注目、稲むらの火の出来事が起きた11月5日を「世界津波の日」と定めました。日本の一村のエピソードが、世界中の防災への啓蒙につながったのです。

災害について語り合い、伝えていくこと
「稲むらの火」を巡る歴史には、さまざまな教訓があります。地震が来たら高台に登れ、という直接的な教訓もあります。実際に、戦前に小学生だった年代の方にとっては、この教訓は鮮烈だったらしく、戦後の津波（例えば1964年の新潟地震）においても避難行動におおいに役立ったといいます。
そして震災における機知と自己献身の大切さも、この物語は教えてくれます。
何よりも、震災の歴史を人々が語り継ぐ大切さを教えてくれます。1つのエピソードが、160年以上にわたって、防災の啓蒙に生かされているのです。
私たちも、災害について語り合い、伝えていかなければならないのではないでしょうか。災害の歴史を風化させずに、語り継ぐこと。これが将来にわたる防災につながると思います。
出典元@思則有備（しそくゆうび）

シリーズ 町田の被災史-2
（シリーズ出典　いさぼうネット　より）

2.1町田市鶴見川筋の「びゃく」
重政（2017）によれば、享保三年九月十二日（1718.10.5）に大雨がありました。川が満水となり、川端の屋敷へ水が上がり、家財が押し流されました。「百年にも覚えこれなく、勿論語り伝えにも承らざる」大雨でした。並木では新築したばかりの居宅が「ひゃくニてひしと潰れ、扨々大水ニて堰々申すに及ばす、所々ひゃく打多く、永々田畑に成り難き所多く出来」とあり、川筋で何か所も山崩れが起こったことが記されています。

2.2　町田市小野路町・萬松寺の裏山の崩れ「ヒャク打込」
町田市小野路町（旧南多摩郡小野路村）は、江戸時代には大山街道の宿場町として栄え、現在も小野路宿通りは当時の雰囲気を残しています。通り沿いにある小島資料館（開館は第1・3日曜の午後のみ）で、小島政孝館長や町田

地方史研究会の重政文三郎様から色々教えて頂きました。

安政六年八月二十一日（1859.9.17）の小島日記『雑書』（小島資料館蔵）によれば、「当七月十二日（1859.8.10）大雨ニ而玉川・相模川満水、堤等押流し申候、同月廿四日（8.22）ヨリ之大雨ニ而、廿五日九ツ時（12時）、村方下宿通り、不残押流し申候、萬松寺裏ノ山崩タリ、井戸迄押潰申候、旦中惣人足ニ而片付申候、五反田角左衛門畑崩出コボヲシタ孫兵衛分弐畝（200m2）分程ヒヤク打込、其外に處々山ツナミノコトク崩出、道橋損し往来兼申候間、郷中惣人足ニ而相片付、一ト通リ明人馬通行為致候、本普請者追々ニいたし候積、村役人一同評議決定いたし申候」と記されています。

2.３　町田市小野路町・小島資料館の「ビャク」

小島資料館の小島政孝館長から、小島日記の中に明治20年頃、小島資料館（元は名主の建物）の中に裏山から「ビャク」が流れ込み、建物が被災したという記録があると言われました。

2.４　町田市立金井大ビャク児童公園

写真3　町田市立金井大ビャク第2公園

2.５　町田市立金井大ビャク第2公園，大ビャク駐車場

写真4　大びゃく駐車場

図4は、町田市玉川学園周辺のT3-6～T3-10の「ビャク」の位置を清水（2004）『多摩地形図1942―44年』の「玉川学園」「本町田」の図幅上に示しました。背景の地形図は小田急線が昭和4年（1929）に開通してから間もなくの土地利用状況を示しています。

小田急線玉川学園駅からふれあい坂を上り、西に金井町方向に歩いて行くと、「町田市立金井大ビャク児童公園」、「町田市立金井大ビャク第2公園」（写真3）、「大ビャク駐車場」（写真4）があります。田中正大様に現地を案内して頂き写真撮影しましたが、特に金井大ビャク第2公園は高い擁壁が建設されていました。児童公園であるにも関わらず、ビャクに関する説明はありません。現地調査時に、清水（2004）『多摩地形図1942-44年』とゼンリン住宅地図（町田市）で位置を確認し、図5にT3-6，T3-7，T3-8，T3-9，T3-10の位置を示しました。田中（2009，2013）はこの付近の谷地斜面で、しばしば「びゃく」が発生していたことが、このような地名に残っていると記しています。

金井町内会（2002）『町誌金井』（p.67-69）にも本町田村境に「大びゃく」の地名がありました。金井村の方言として、「びゃくがくむ：崖が崩れる」（p.176）と記載されています。

図4　町田市玉川学園付近の「ビャク」の位置図
（『多摩地形図1942―44年』の「本町田」「玉川学園」上に追記）

私の3.11その５

3名の社員が帰宅困難者になり、責任者として自分も一緒に職場で一夜を過ごしました。
停電にならなかったのでテレビで情報を得ることが出来たのは幸いでした。
翌朝電車が運転再開になり、皆を駅まで送り届けたあとようやく自宅に戻りました。
帰宅しても眠れず、ただただ映し出されるテレビの被害映像に呆然と見入っていたのを覚えています。
その後、ガソリンが入れられなくなるなど予想もせず・・・。
あの土日に先々を見据えガソリンを補充するとか、もっと動くべきでした。（　一丁目　60代　女性　）

私の3．11その６

その日は遅い昼食を済ませ、午後の仕事に取り掛かって間もなくであった。小さな振動で始まり大きな揺れ、それも過去経験のない怖い揺れは、建物の軋み音と壁に架かった額絵のぶつかるドーンドーンという音で「危険」を感じた。

さらに足元はうねる海の小舟に乗っているような感じで、背後のスチール製書棚がグシャという音と共に座屈、恐怖が最も増幅された時だった。時計を見ると２時４６分を少し回っていたかと思う。

場所は新宿のペンシルビルの７階。階上から次々と社員が道路に退避する様子が見える。勿論エレベーターは停止。通りに出て社屋を見上げると、ビル同士が同じ方向に揺れるのではなく、隣のビルと互いにぶつかるのではないかと思う異様な揺れ。後で分った長周期地震を目の当たりにした。

家内の安否を携帯で確認、この時はすぐ繋がった。友人達と都内に来ていて、家内と交わした言葉は、無事の確認と遭難時の鉄則「体力の温存」であった。家内には食べ物屋へ避難するように伝え、私は他の社員と共に、地下の食べ物屋を確保した。何度か余震のあと、夜には揺れも収まり、社屋に戻り交通情報に耳を傾けた。しかし、あらゆる情報が混乱している。この頃には、家内との連絡がつかなかった。

深夜０時５分小田急線の開通を知り午前１時３５分帰宅。家内は、やや遠回りしたようで１時間遅れの２時半、無事帰宅した。　（三丁目　70代　男性）

鶴川駅改札口で、乗客が改札ゲートに乗って浸水を避けている様子。
9月8日から11日にかけて猛威を振るった台風17号により、大規模な水害が発生した。
町田市は都市化が進むにつれて排水機能が失われ、大量の雨水が下水道や河川に流れ込むことで発生する浸水被害に悩まされていた。（昭和51年）

編集後記

私も、このような鶴川駅の光景を目の当たりにした経験があります。自分が経験した事は、たとえそれが白黒の古い写真であっても、事実として受け止めて真剣に考えるきっかけとなります。

首都直下地震を題材としたNHKのドラマは、政府がまとめたデータを基にしたもので、恐らく近い将来起こる事を正確に映像化したものだと思います。難しいのは、自分が体験していないため、事実として受け止める事が出来ない事です。

防災隊の会議では、自身が普段心がけている事を話してくれる隊員がいます。「車の燃料は、4分の３以下になったら、必ず給油している。おかげで東日本大震災の時、スタンドの列に並ばずに済んだ。」
他愛もない話ですが、知り合いのこの話は、実体験と同じ効果がありました。今では、車の燃料計を見るたびに、この話を思いだします。